



萌野

大岡昇平

講談社

萌 野

昭和四十八年六月四日 第一刷発行

著 者 大岡昇平

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二 郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五―一二二(大代表) 振替 東京 三九三〇

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

定価六八〇円



落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。

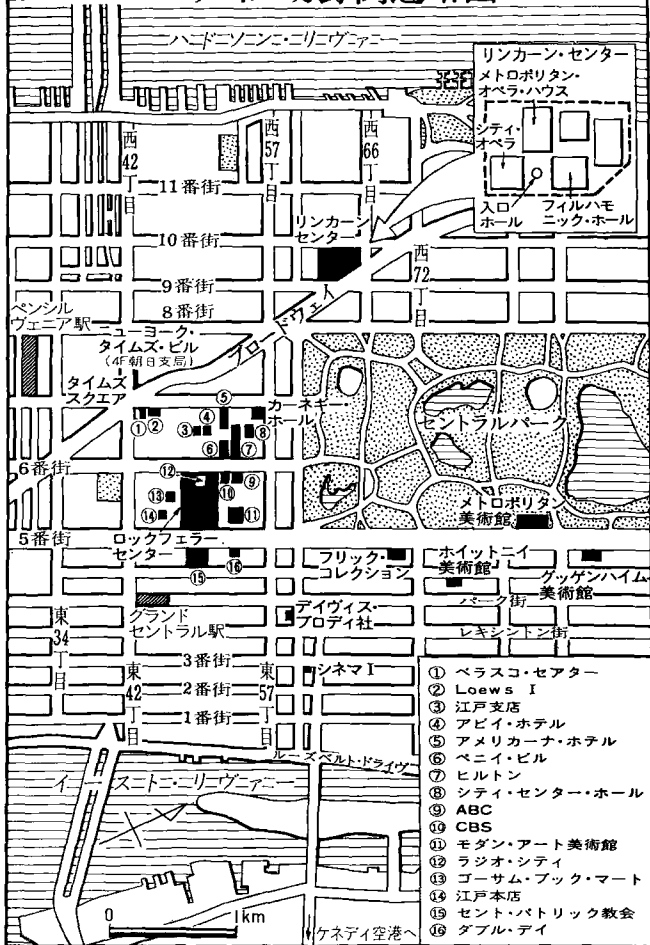
© Shohsei Ooka 1973. Printed in Japan

萌も

野や

装帧 摄影
高松次郎 渡辺洋美

ニューヨーク市・萌野関連略図



- ① ベラスコ・セアター
- ② Loews I
- ③ 江戸支店
- ④ アビー・ホテル
- ⑤ アメリカーナ・ホテル
- ⑥ ベニイ・ビル
- ⑦ ヒルトン
- ⑧ シティ・センター・ホール
- ⑨ ABC
- ⑩ CBS
- ⑪ モダン・アート美術館
- ⑫ ラジオ・シティ
- ⑬ ゴーサム・ブック・マート
- ⑭ 江戸本店
- ⑮ セント・パトリック教会
- ⑯ ダブル・デイ



一九七二年四月八日午後七時半、メキシコ・シティ発ニューヨーク行イースタン・エアライン機は、ニューヨーク近郊のケネディ空港に着陸しようとしていた。「天候、曇、地上温度華氏三八度摂氏一度」など、機内放送まであり来たりの段取りだったが、「ミスター・オオカ」と不意に私の名が出て来たので、どきっとした。

「メッセージがありますから、お降りになったらすぐ当社案内係にご連絡願います」

ニューヨークで私がこの機に乗っているのを知っているのは、切符をアレンジしてくれた日本航空と、息子の貞一しかない。彼は去年ブルックリンの「ブラット・インスティテュート」芸術大学卒業後、東五十九丁目のデイヴィス・プロディという建築会社に勤めている。昨夜、メキシコ・シティから電話して、迎えに来ることになっていたが、その後予定が狂って、ひと便おくれた。その変更を彼に伝えることができず、不安な気持で乗ってきたのだった。

四月一日、日本航空はヴァンクーヴァー經由メキシコ・シティ行の航路を開設し、私はイノ

ギュレーシオン・フライトに招待された。カナダの雪山とトームボール、メキシコの太陽とピラミッドと壁画を見て、地球上にはアジアとも西欧ともまったく違う文化があるということを得たが、一週間の団体旅行で、私は疲れ切っていた。

ニューヨークにいる息子には、二年前の夏、彼が休暇で帰った時から会っていない。その後、私はヨーロッパへ行く機会があったが、アメリカへは一九五三―五四年以来、行っていない。息子のニューヨークでの生活は、手紙と電話、或いは時たまニューヨークを通過する知人の話によってしか知らないのである。

一九六七年結婚し、新婦共々渡米している。昨年六月、建築会社の正規社員に採用されてから子供を作る気になった。その子がまさに生れようとしていた。空路わずか四時間のメキシコシティまで来ていながら、寄らないわけに行かないのである。或いは、息子の顔、ことによると初孫の顔を見る機会とするのが目的で、日航の招待に応じたのだった。

朝十時半の便で発ち、午後三時半着く予定だったところ、日航のメキシコ事務所とイースタン・エアラインの間に連絡不備があり、私と同じくニューヨークに廻る二人の招待客と共に、午後の便に変更された。ニューヨークの日航事務所から、午前中にそれぞれ電話連絡してくれたはずだったが、二時十五分、搭乗の時にになって、息子のアパートの電話に返事がない、と知らされた。三十分ごとに呼び続けることを依頼して乗って来たのだが、それが間に合ったかど

うか。

ゲートに入ると、若いアメリカ人が近寄って来た。

「ミスター・オオカですね」とたしかめてから、メモを渡してくれた。「テイイチ・オオカは迎えに来られない。二五五―四九六九へ電話するように」と書いてある。

二時十五分にまだ連絡がついていなかったのだから、息子は一度空港まで来たことになる。家には臨月の妻がいて、二度空港との間を往復できないだろう。だから迎えはいらない、ホテルへ着いてから電話する、と私は昨夜の電話で主張したのだが、息子としても、始めて来る親父を迎えに出ないのは工合が悪いのだろう。無理をしているのである。

われわれがひと便おくれたのは、日航の手落ちともいえるので、空港事務所から係員がゲートまで迎えに来て、通関の間もずっと付添ってくれる。車も用意してあるという。同行のキャノン営業部の吉田千秋氏には、ニューヨーク事務所のM氏が迎えに来ている。宿舎はニューヨーク・ヒルトンを取ってある、という。私のホテルは西八丁目、ワシントン・スクエア付近の「ワン・フィフス・アヴニュー・ホテル」である。息子の住居は西四丁目なので、あまり遠くないところというので、東京の日本交通公社に取ってもらったホテルである。

ニューヨークの街の危険については、いやになるくらい東京で聞かされている。三月に百何丁目かの路上で、電通社員が刺殺されてから、ニューヨークへ行くこと自身、自殺行為のよう

にいわれるのである。しかし私はこの種の情報は太抵誇張されている、と思っている。ホテル中心の生活をしていれば生命を取られるようなことはまずない。二十五ドルも部屋代を取って、

ホテル・ルームが危険ということはまずなからう、とたかをくくっていた。

私は日航の空港事務所から息子に電話し、タクシーで行くつもりだったが、出迎えの日航によると、私の泊るホテルはニューヨーク・ヒルトンのすぐそばだという。吉田氏は私より十歳以上年下の少壮実業家で、大磯で育った方である。飛行機の中で、いろいろ大磯の共通の知人のことなど話し合ってきた。自分の車で送ってやる、と親切にいつて下さる。

出迎えのM氏を余分に煩わすことになるが、とにかく手間が省けるので、御好意に甘えることにした。

ところが車に乗ってから、運転するM氏に聞いてみると、ニューヨーク・ヒルトンは五十三―四丁目にあり、西八丁目とは四キロ以上離れているのである。

「何を勘違いしたんでしょうね。西八丁目は正反対といってもいい。それにあの辺はあまり安全じゃないですよ」とM氏はいう。

「着いてから、仲と相談するつもりですがね。夜はホテルと劇場の間をタクシーで往来するだけにするつもりです」

「そのホテルが危い。ボーイやメイドが危いんですからね。ヒルトンなどは従業員を吟味して

ありますから大丈夫ですが、下町のへんなホテルでは、部屋に踏み込まれて、ホールド・アップされた例がありますから」

「何も部屋におかないつもりです。金は俵にあずけます。服もあずけようかな」

「そんなに苦勞なさるくらいなら、ヒルトンになさったらいかがです。御子息もきつとそうおっしゃると思いますよ。こっちのホテルはいつキャンセルしても違約金は取られません。ヒルトンには部屋はいくらでもあるはずですよ」

俵にはホテルに着いてから電話するつもりだったが、なるほどM氏のいうことは一理ある。鍵は四重ぐらいになっている、ドアをノックされてもあけてはいけない。メイドであっても、サービス・センタ―に電話して、たしかにメイドを派遣したかどうか、たしかめなくてはいいないのだそうである。

こうまでいわれては、私としてホテルを替えるのに躊躇する理由はない。M氏は実に親切な方で吉田氏のチェック・インの手続きをすませた後、すぐ私の部屋の交渉をして下さる。幸い部屋はあった。この間に私は貞一に電話する。

彼もホテルを変えるのに賛成であった。西八丁目は最近の危険人種の移動のため、一番危い街になったという。とにかくすぐタクシーで来るという。いずれにしてもまず飯を食わなくてはならない。二十分後、ロビーで会うことにして、電話を切った。十時に近かった。

部屋は十階の一〇五二号。ヒルトンらしい単純で機能的設計、ベッド二つあり、テレビあり、レートは二十九ドルで少し高いが、まずまずの部屋である。顔を洗い、金と旅券だけ懐へ入れて下に降りれば、ホテルのロビイのアメリカ人の群の中でも、ひとときわ高き大男と、臨月の腹を突出した嫁の博子が、回転ドアから入って来るところだった。博子は現代の女性の平均身長だが、一八七・五センチの貞一の傍では大木にとまった蟬の感じ。——大磯、東京で見馴れた併立歩行形だが、これを見ざること久し。アメリカのホテルのロビイで、同じ形を見るのは、なんとも変な感じ——日本で見たとちっとも変らないものを見るのが、変なのである。

貞一はコールテンの上下、髪は延ばしている。画学生の持ちそうなバッグを肩からぶら下げている。博子はインディアン模様の、爪先までずんどうの厚いミディのオーバーコート、漁師か消防夫の着る厚司あつしに似ている。臨月の腹をかくすためのデザインだろう。

「博子さん、来なくてもいいのに」

私はまず臨月の嫁をいたわらねばならぬ。

「大丈夫です」と博子は笑う。「もう落着いて来ました」

「空港へも行ったんですよ」と貞一が口を添える。「行かなかったら、あとでなにいわれるか、わからないからね」

フロントの前のソファにとにかく腰かける。

一応、手違いについて説明。土曜日で事務所は休み、朝からうちにいたが、昼食を空港で食うつもりで十二時に家を出てしまった。ところが予定の三時半には、私がゲートから出て来ない。次の便の乗客名簿を見せろ、とイースタン・エアラインと交渉したが、見せない。二日前にハイ・ジャックがあったばかりだからである。やっとリザーベーション・リストを見せてくれた。すると、たしかに朝の便には載っているの、どこかですれ違ったと思い込んでしまった。「ワン・フィフス・アヴニュー・ホテル」になんと電話しても、着いていない。遂にあきまて、六時すぎアパートに帰ってぼけっとしているところへ、七時半に看くと日航から電話がかかった。これが七時十分、とても間に合わないの、イースタン・エアラインに私にメッセージを渡すよう、厳重にかけ合って、私からの電話連絡を待っていた由。

「吉田さんに会わなかったら、飛行場からかけたんだがね。このホテルの方が博物館廻りには便利だし、お前の事務所からも遠くない。かえって便利ともいえる。どうせ往復はタクシーになるんだから」

「まあそうですね。西八丁目はタクシーに乗るには近く、歩くのは遠いという距離——毎日送り迎えちょっと辛いなと思ってた」

「とにかくめしだ。吉田さんがいっしょにといって下さるのだけど、もう十分お世話になった、遠慮しようと思うんだ」

「それがいいでしょうね。何がいい、すし屋もあるよ」

「少しばて気味だ。油気がほしいな、すき焼か天ぷらだ」

そこへ吉田氏とM氏降りて来る。食事を遠慮したのだが、倅が考えた店と、M氏が考えた店は同じだった。ニューヨークには現在日本料理店が二百軒あるが、こんな時考える店は大抵同じなのである。

再びM氏の車に乗って出発。ただし時間がおそいのでその店はしまっていた。ブロードウェイから四十七丁目を東へ入ったところの「江戸」にかけ合っている。

吉田氏に感謝して日本酒で乾杯。天ぷらはないので、肉のテリ焼、貞一たちはすしを注文する。だんだん聞いてみると、M氏もニューヨーク在住五年、奥さんはこっちでお産したという。「病院は五日しかおいてくれないから、きついですよ。でも、麻酔であつという間に生れちゃったから、楽でした」

「ぼくの方は自然分娩で行こうと思ってるんです。陣痛といいますが、あれはほんとうは痛みではないので、苦痛は主に恐怖から来る心理的なものなのです。妊婦に予め十分暗示が与えられてあれば、大丈夫だそうです、正確には精神予防性無痛分娩 *psychoprophylaxis* といって、云々」

博子は週一回六週間講習を受けに通った、などなど、初めて子供の誕生を控えた夫妻は、学

のあるところを見せる。M氏にもまた別の意見あり。

興味津々たる話だったが、吉田氏も私も疲れているので、まもなくお開きにして、ホテルへ帰った。

「ニューヨークへ着いて、二人の若い男からお産の話を聞かされるとは思いませんでした」

と吉田氏は苦笑する。氏は気が若い。前日はメキシコシティの広場で、徹夜で飲んだという豪傑である。

一応ホテルの部屋へあがる。博子のお母さんからの預り物。貞一の母親からはセンペイ、塩辛、「ホープ」など。私からはメキシコのピラミッドのそばで買った銀の赤ちゃんおさじが博子への贈物である。

「飛行機の中で香水買うつもりだったら、メキシコ—ニューヨーク間にはフリー・タックスがなかったんで、予定が狂っちゃった」

と弁解する。私はもう齢だから、荷物はなるべく小さくしてある。海外持出し金額は、大体いっぱいまで持って来である。残った金をお産の臨時費としておいて行くわけで、実をいえばこの金を届けるのが、主な役目である。運び屋である。

現金とトラヴェラーズ・チェックを部屋におくなく、という札がテーブルにおいてある。あまり愉快な札ではないので、裏返しにしたが、裏にも同じことが刷ってある。やはりこれが、ホ

テルの一番の悩みなのである。

当座の小遣いを残して、トラヴェラーズ・チェックも貞一に渡した。十一時半別れる。明日は日曜日、家ですき焼を食わしてくれるという。

「お昼からでも、いつでも、いらして下さい。そうめんぐらい作りますから」と博子。

「まあ、今日一日働かしたんだから、明日はゆっくり休んでもらう。こっちも一週間の団体旅行でばてる。多分一日寝てるだろうな。夕方行きますよ」

二人の姿がドアから消えると、バスを取るのも面倒臭く、ベッドに入るとすぐ寝入った。